

第百二回 参議院文教委員会會議録第一号

昭和五十九年十二月一日(土曜日) 午前十時二十二分開会

委員氏名

- 委員長 真鍋賢二君
- 理事 杉山令肇君
- 理事 久保亘君
- 理事 吉川春子君
- 理事 井上裕君
- 理事 藏内修治君
- 理事 山東昭子君
- 理事 世耕政隆君
- 理事 田沢智治君
- 理事 仲川幸男君
- 理事 林健太郎君
- 理事 林道君
- 理事 柳川覺治君
- 理事 粕谷照美君
- 理事 中村哲君
- 理事 安永英雄君
- 理事 高木健太郎君
- 理事 高桑栄松君
- 理事 小西博行君
- 理事 美濃部亮吉君

出席者は左のとおり。

- 委員長 真鍋賢二君
- 理事 杉山令肇君
- 理事 仲川幸男君
- 理事 久保亘君
- 理事 吉川春子君
- 委員 井上裕君
- 委員 山東昭子君

世耕 政隆君	林 健太郎君	林 道君	柳川 覺治君	粕谷 照美君	中村 哲君	安永 英雄君	高木健太郎君	高桑 栄松君	小西 博行君	美濃部亮吉君
文部大臣	文部大臣	松永 光君	鳩山 邦夫君	面崎 清久君						
政府委員	文部政務次官		文部大臣官房長							
事務局側	常任委員会専門員		佐々木定典君							

本日の會議に付した案件

- 理事補欠選任の件
- 調査承認要求に関する件
- 小委員会設置に関する件
- 派遣委員の報告に関する件

○委員長(真鍋賢二君) ただいまから文教委員会を開会いたします。

この際、一言ごあいさつを申し上げます。

私、先般、文教委員長に選任されました真鍋賢二でございます。何分ふなれではございますが、皆様方の御指導と御協力を賜りまして、円滑かつ公正な委員会の運営を行ってまいりたいと存じます。

何とぞよろしくお願い申し上げます。(拍手)

○委員長(真鍋賢二君) まず、理事の補欠選任についてお諮りいたします。

委員の異動に伴い、現在理事が一名欠員となっておりますので、その補欠選任を行いたいと存じます。

理事の選任につきましては、先例により、委員長の指名に御一任願いたいと存じますが、御異議ございませんか。

〔異議なし〕と呼ぶ者あり

○委員長(真鍋賢二君) 御異議ないと認めます。それでは、理事に仲川幸男君を指名いたします。

○委員長(真鍋賢二君) 次に、調査承認要求に関する件についてお諮りいたします。

本委員会は、今期国会におきましても、教育、文化及び學術に関する調査を行うこととし、この旨の調査承認要求書を議長に提出したいと存じますが、御異議ございませんか。

〔異議なし〕と呼ぶ者あり

○委員長(真鍋賢二君) 御異議ないと認め、さよう決定いたします。

○委員長(真鍋賢二君) 御異議ないと認め、さよう決定いたします。

○委員長(真鍋賢二君) 次に、小委員会の設置に関する件を議題といたします。

義務教育諸学校等における育児休業をめぐる諸問題について調査検討するため、小委員十名から成る義務教育諸学校等における育児休業に関する

小委員会を設置することに御異議ございませんか。

〔異議なし〕と呼ぶ者あり

○委員長(真鍋賢二君) 御異議ないと認めます。つきましては、小委員及び小委員長の選任は、先例により、委員長の指名に御一任願いたいと存じますが、御異議ございませんか。

〔異議なし〕と呼ぶ者あり

○委員長(真鍋賢二君) 御異議ないと認めます。それでは、小委員に山東昭子君、杉山令肇君、仲川幸男君、柳川覺治君、粕谷照美君、久保亘君、高木健太郎君、吉川春子君、小西博行君及び美濃部亮吉君を指名いたします。

また、小委員長に仲川幸男君を指名いたします。

なお、小委員及び小委員長の辞任の許可及びその補欠選任、並びに小委員会から参考人の出席要求がありした場合の取り扱いにつきましては、これを委員長に御一任願いたいと存じますが、御異議ございませんか。

〔異議なし〕と呼ぶ者あり

○委員長(真鍋賢二君) 御異議ないと認め、さよう決定いたします。

○委員長(真鍋賢二君) この際、松永文部大臣及び鳩山文部政務次官から発言を求められておりますので、順次これを許します。松永文部大臣。

○国務大臣(松永光君) このたび文部大臣を拝命いたしました松永光でございます。

文教行政は、人づくりという国政の根幹にかかわるものであり、いつの時代においても国政の基本となるものと確信いたしております。文教行政に対する国民の関心と期待が極めて大きいこの時期に文部大臣に就任いたしました、その責任の重大さを痛感しております。微力ではありますが、我が国

の教育、学術、文化の振興のため、持てる力すべてを傾注してまいる所存であります。当委員会の御審議の趣旨を体して文教行政を進めてまいりたいと考えておりますので、委員長並びに各委員の皆様方の御指導、御協力をお願い申し上げます。ごあいさつといたします。(拍手)

○委員長(真鍋賢二君) 鳩山文部政務次官。

○政府委員(鳩山邦夫君) このたび文部政務次官を拝命いたしました鳩山邦夫でございます。

文教行政という国の根幹にかかわる重要な分野に携わることとなり、その責務の重大さを痛感いたしました。微力ではございますが大臣を補佐し、全力を尽くして我が国の教育、学術、文化の振興に努力してまいる所存でございます。委員長並びに委員の皆様方の御指導、御協力を心からお願い申し上げます。ごあいさつといたします。(拍手)

○委員長(真鍋賢二君) 次に、派遣委員の報告に関する件についてお諮りいたします。

先般、当委員会が行いました教育、学術及び文化財の保護に関する実情調査のための委員派遣につきましては、両班からそれぞれ報告書が提出さ

れておりますので、これを本日の会議録の末尾に掲載することにしたと存じますが、御異議ございませんか。

〔異議なしと呼ぶ者あり〕

○委員長(真鍋賢二君) 御異議ないと認め、さよう取り計らいます。

本日はこれにて散会いたします。

午前十時二十七分散会

(参照)

文教委員会委員派遣第一班(北海道)調査報告書

一、派遣目的 教育、学術及び文化財の保護に関する実情調査

二、派遣委員 委員長 真鍋賢二

理事 杉山令肇

委員 藏内修治

同 林 道

同 安永英雄

三、派遣地 北海道

四、派遣期間 昭和五十九年一月二日(火)〜四日(木)

五、派遣日程

月日(曜)	発地	着地	視察箇所	宿泊地
一月二日(火)	東京	函館	北海道教育庁実習船管理局 北海道函館西高等学校 北海道五稜郭養護学校 函館工業高等専門学校	函館
一月三日(水)	函館	札幌	八雲町立春日小学校 長万部町立長万部中学校 虻田町立火山科学館 北海道立洞爺少年自然の家 北海道庁(道勢及び教育概況の説明聴取) 酪農学園大学 北海道開拓記念館 大倉山ジャンプ競技場	札幌
一月四日(木)	札幌	東京		

六、調査の概要

○道勢及び教育概況

知事及び道当局から次のような説明及び要望が

行われた。

1 道勢概況

本道の面積は八三、五一八㎢で、全国の面積の約二二%を占めている。また、人口は五、五七五、九八九人(昭和五十九年国勢調査)であり、人口密度は六七人/㎢と全国で最も希薄な地域となっている。一方、財政指数は〇・四一七二五で全国二六位であり、歳入の二四・一%を地方交付税が占めている(五十七年度)。

本道では、五十二年に策定した北海道発展計画に基づき、開発を進めているが、長期発展の起動力として期待されている苫小牧東部工業基地開発、石狩湾新港地域開発など工業振興の主要プロジェクトや青函トンネル、国際空港の建設など基盤の整備、北方圏との交流の推進は、広く道内外の注目を集めている。

2 教育概況

本道では、教育のあるべき姿を模索して「北海道教育長期総合計画(五一年度〜六〇年度)を策定し、教育行政を合理的、効率的に発展させることをめざしている。

五十九年度教育関係予算総額は四、三七六億五、六〇〇万円で、道予算総額一兆六、四〇三億円の二六・七%を占めており、前年度に比べて三・一%の伸び率となっている。

主要な教育施策についての説明及び国に対する要望は以下のとおりであった。

(1) 教職員の資質向上と学級編制・定数の改善  
校内暴力は五十八年度には中学校で一一一件(三九一人)、高校で一二件(四四九人)発生したが、今年度は中学校、高校とも大幅に減少している。昨年度は漁村部で多く発生したことと、問題の発生した学校では教職員の意思がまとまっていなかったということが特徴となっている。また、校長のリダーシップによって立ち直ったというのが顕著な事例であった。

このような非行の沈静化も含めて、教育の成果をあげるためには教職員の資質向上が重要であるため、研修を充実させるとともに、集団フ

リートキングや実技試験を重視することによって、やる気のある教員の採用を図ることとしている。

また、教職員定数等の改善計画は国において抑制中であるが、その早期実現について、あらゆる機会をとらえて要望していくこととしている。

(2) 義務教育施設の整備促進

六〇年度に公立小・中学校の校舎及び屋内運動場の不燃化率を八五%に、不足面積の整備率を八八%にすることを目標にしているが、当面は急増地域における校舎の不足面積、木造危険建物の改築、屋内運動場未保有校の解消を重点として進めていく。

五十九年度は延べ三二二校二六七、八一二㎡の国庫補助の確保に努めているが、市町村の財政事情が極めて厳しいので、緩和策の一つとして、国庫補助制度の改善を国に働きかけている。

(3) 高等学校教育の充実

本道の五十八年度の高等学校収容率(中卒者数に対する高校入学定員比)は九九%に達しているが、進学率は九三・一%と全国平均の九四・〇%よりやや低くなっている。今年度は新たに二校が開校するほか、一七校の開設準備を進める。さらに既設校についても必要な増改築を進めていく。

また、定時制通信制教育について、改善の検討を進めるとともに、教科書の無償配布や学資金の貸付けを行うほか、五八校一、七七三人を対象に集団宿泊指導を実施する。

(4) 障害児教育の充実

今年度新たに養護学校二校が開校し、さらに九校の開設準備を進めていく。また、視覚障害児の早期教育のため、旭川盲学校幼稚部に三歳児を対象とする学級を新設したほか、特殊教育センターの設計に着手し、早期に開設できるように努める。

(5) 幼稚園教育の振興

本道では四、五歳児については保育所措置児、障害児教育対象児を除いた全員の就園を目標とした振興計画を立てているが、就園率は年々向上しているものの、五八年度は五八・五%と全国水準(六三・八%)に比べるとまだ低い実態である。また、市部(六六・一%)と郡部(三八・四%)の就園率にも大きな格差が存在している。このような事情を踏まえながら、引き続き、市町村との連携を図りつつ設置の促進に努力していく。

(6) その他  
青少年の健全育成に資するため、青函連絡船を活用しての洋上学習と本州の青少年との交流を図る少年の船事業や児童生徒と青年が一体となって豊かな自然の中での生活を体験する青少年野外活動事業を実施していく。

また、児童生徒の体力向上を図るとともに、本道で開催される六〇年の全国中学校選抜競技大会、六二年の全国高校総合体育大会、六四年の完全国体に向けて施設整備と選手強化対策に取り組んでいく。

さらに、道立旭川美術館に次ぐ第二の道立美術館を函館市に設置することとし、その準備を進める。

なお、道当局より次のような要望が行われた。

(1) 昭和六〇年度文教予算に関し、小・中学校四〇人学級計画及び教職員配置改善計画を推進するとともに、義務教育諸教科書無償給与制度を堅持してもらいたい。

(2) 校舎、屋内運動場、産業教育施設など公立小・中・高等学校施設の整備を促進してもらいたい。

(3) 公立養護学校施設の整備を促進してもらいたい。

(4) スクールバス、教員宿舎、集会室などへき地教育施設の整備を促進してもらいたい。

(5) 社会教育施設のうち、公民館、図書館、博物館の整備を促進してもらいたい。

(6) 水泳プール、柔剣道場、体育館など学校体

育施設、社会体育施設の整備を促進してもらいたい。

(7) 国立医科大学、国立複合大学、国立芸術大学の設置など高等教育機関の整備を促進してもらいたい。

また、函館市当局より、南北海道地域には独立した国立大学がなく、大学進学者の約八〇%が他地域への進学を余儀なくされている現状にあるため、北海道教育大学函館分校を母体として、教育学部、社会学部、経済学部からなる国立函館複合大学を設置してもらいたい旨の要望がなされた。

○初等、中等教育関係  
1 八雲町立春日小学校

本校は明治三十一年、春日地区の土地の三分の二を所有していた農場主鈴木義宗氏が小作移住民の子弟の教育のために開いた私立上砂蘭部学校に始まる古い歴史を有する学校である。現在児童数は、一、四、六年生が各二人、二、三、五年生が各四人の計一八名(男子一二人、女子六名)の小規模校である。教職員は校長、教頭及び教諭二名の計四名であり、教頭と二名の教諭が二学年にまたがる六名ずつのクラスをそれぞれ担任している。本校は場を清める(空間の秩序)、時を守る(時間の秩序)、礼を正す(人間関係の秩序)を学校経営の三大根本原則に掲げ、徳育、体育、知育のうち、特に徳育を重視した教育を実践し、小規模校だが、教育経営は安定しているとのことである。

また本年度は「姿勢を正す教育」を重点点に取り上げている。これは姿勢を正すことにより心身の安定が得られ、そこから思考力、意志力、集中力、忍耐力、持続力、行動力の意識が育つてくるという考えに基づくものである。

本校の特色ある教育活動として、北海道八雲養護学校との交流教育が行われている。同養護学校は、進行性筋ジストロフィー症や脳性麻痺などの児童生徒の教育を行っている病虚弱養護学校である。交流教育は教科(国語、音楽、図工)、道徳教育、

特別活動(児童活動、学校行事、学級指導)の三領域の中で推進されるだけでなく、独自の交流教育行事が幅広く行われている。まず、大きな交流行事としては、七月の七夕まつり、九月の秋の春日会、十一月の養護学校祭、一二月の交流祭があり、その他学級ごとに随時行う小集団交流、各学期一回程度行う作品交流、行事の前後のあいさつ状、賀状の交換をはじめとする文通交流などが行われている。さらに、両校の交流教育研修会において職員間の交流が行われている。

そして、これらの交流教育を通じて、①計画に参画することにより、自主性、自律性、協調性が生まれ、積極的な態度が育った、②障害克服に真剣に努力している姿に接して自覚と努力が促された、③職員に幅広い教育観が育ち、教職観、人生観を深めることができた、などの成果がみられたということである。

また、①町内関係者のより一層の理解を深めること、②憐憫の情で見たり、甘やかしの教育にならぬよう留意すること、③直接交流を通して児童同士の触れ合いをもつと深める工夫をすること、④無理のない計画に基づいて地域父母に協力を要請すること、が今後の課題であるとのことである。

最後に、本校のような小規模校では、定数上、校長、教頭のほか教諭二名が配置されるだけであって、養護教諭や事務職員は配置されないことになっており、教頭がクラスを担任したうえ、学校事務まで分掌せざるを得ず、教頭としての職務遂行が困難な実情となっている。このため、別枠の教頭定数を確保してもらいたい旨の要望があった。

また、障害児教育については、道内では広い地域にさまざまな障害をもつ子どもがおり、これらの障害児がその地域で教育が受けられるよう、あと二、三校養護学校を設置してもらいたい旨の要望があった。

2 長万部町立長万部中学校  
本校は昭和五七年度に町内の四中学校(長万部、国縫、静狩、双葉)が統合されて開校した。

学級編制は各学年四学級と障害児学級一学級の一三学級で生徒数は四九九名である。教職員は校長、教頭のほか教諭二名、養護教諭、事務職員各一名の計二五名となっている。

統合三年目の本年度は①新しい校風づくりをさらに推進する、②教職員相互の意思の疎通を図り、共通意識を醸成する、③生徒一人一人に目を向けた指導を行う、特に教科相談を含めた教育相談の充実を図る、の三点を重点目標として取り組んでいる。

統合により、生徒の通学距離は最遠一〇kmとなり、スクールバスを三方面に運行している。また、下校時には、一般の運行のほか部活動を行ってから帰る生徒のための運行も行っている。

全体におとなしい生徒が多いが、統合二年目の昨年は延べ一〇名が問題行動を起こし、三カ月ほど対教師暴力や施設破壊が続いたが、今年二学期からは無くなった。また怠学による長期欠席者が三名いるほか、校外での喫煙行為が年に数件ある。

このような問題行動は統合前にはなかったが、これは小規模で目が行き届いたということもあるが、問題が生じても表に出さなかったという面もあったのではないかと、何か問題が生じると、父母がすべて統合のせいにするという風潮も見受けられるとのことである。

非行等の原因としては、まだ統合二年目で教師が多学級に対応し切れなかったこと、母親が働きに出ていて家が近いことや、家庭での甘やかしなどもあって、生徒が集団不応を起したことがなどが考えられる。

このため、本校では、教師の質の向上を図るとともに、生徒が熱中できるものを持つことが必要と考え、部活動等を推進している。現在は八〇%の生徒が部活動に参加し、陸上一、五〇〇mでは全国一〇位、柔道では全国大会決勝リーグ進出等の成果を上げているとのことである。

本校の校舎は鉄筋コンクリート三階建ての近代的な建物であり、隣接して建てられたカラフルな

朱塗りの屋内体育館や整備された広い運動場が目  
を引いた。また本年八月には水泳プールが完成し  
た。校舎内には一般教室のほか、L.L教室、視聴  
覚教室、美術室、技術室、理科室、音楽鑑賞室、  
家庭科教室、畳敷きの作法室などの特別教室が整  
備されている。また、特色ある施設としては、全  
校生徒と教員が一度に食事をする事ができる給  
食室が設けられている。五〇〇名の生徒が一室に  
会しての食事風景は壮観であり、われわれも一緒  
に食事をとったが、教師と生徒とのコミュニテイ  
を育てようとする強い意欲がうかがわれた。

3 北海道立函館西高等学校

本校の前身である北海道庁立函館高等学校は  
道内二番目に設立された高女として、明治三十八  
年五月に開校した。その後、昭和二五年に男女共学  
制とするのと同時に、定時制を併置し、北海道函館  
西高等学校と改称して現在に至っている。なお、  
五五年から昨年度まで五〇億円を投じて校舎の改装  
が行われ、四階建ての管理特別教室棟、五階建て  
の一般教室棟、屋内運動場、格技場などが整備さ  
れた。

本年四月現在、全日制の在学者は男子五〇三  
名、女子五七九名の計一、〇八二名である(概し  
て学力の高い女子生徒が集まる傾向があるが、こ  
れは旧高女の伝統によるものであろうとのこと  
である)。昨年度卒業生三四八名のうち大学に合格  
した者は六四名、短大合格者四九名、専修学校合  
格者は七九名となっている。また就職者は一二六  
名であつて、うち道内就職者は一一〇名である。  
定時制は男子七八名、女子一九名の計九七名であ  
り、卒業生二三名のうち、専修学校進学者二名、  
道内就職者一〇名、道外就職者一名であつた。

教育面では、高女以来の女子教育の伝統の良  
面を残していくとともに知育に偏らず、体育、文  
化系の活動を活性化させたいとのことであつた。  
生徒は概しておとなしく、しかし少し目を離す  
と掃除をしないなど自主性に乏しく、毎日のこつ  
こつとした努力に欠けるといふような面も見られ  
る。このため根気よくしつけ教育を行い、日常生

活の中で積極性を身につけさせようとしてい  
る。なかなか思うように進まぬということであ  
る。しかし、生徒に対する世評はなかなかよいと  
のことであつた。なお、喫煙や備品の持帰りなど  
がたまにあるが、校内暴力や性非行などは起きて  
いない。(またバイクについては危険なため免許  
をとらせぬ、乗せぬという指導を行っている。)  
次に、定時制では、四月当初の在学者一〇七名  
が、学年末には、九三名に減少し、一三%もの退  
学者が出るという状況となつてゐる。これは、特  
に漁村部などが全国でも有数の高い離婚率となつ  
ており、家庭環境の厳しい生徒が多いことにもよ  
るとのことであつた。

4 北海道教育庁実習船管理局

高校における水産教育のための実習船は、かつ  
ては、小樽、函館、厚岸の各水産高等学校にそれ  
ぞれ配置されていたが、乗船実習の充実、船員の  
勤務条件の改善及び実習船の管理運営の適切、円  
滑化を図るため、昭和四八年度から本管理局がこ  
れら実習船を集中して管理運営することとなつ  
た。こうした実習船の集中管理方式を実施してい  
るのは全国でも北海道と沖縄だけである。  
調査班は釧路中の実習船北鳳丸に乗船して次の  
ような説明を聴取した。

現在保有している実習船は若竹丸(昭和五九年  
竣工、四四四・〇トン)、北鳳丸(同五〇年竣工、  
四四一・四トン)、若潮丸(同五四年竣工、一九  
九・五トン)の三隻であり、若竹丸は日本近海  
で、さけ、ます、まぐろなどの稚魚、浮魚、すけ  
とうだら、おっとせいの資源調査やいかつり漁

業、若竹丸と北鳳丸は、日本近海での浮魚、すけ  
とうだらの資源調査のほか、北洋でのさけ、ます  
資源調査、南洋でのまぐろ延縄漁業に活用されて  
いる。

乗船実習の対象校は小樽、函館、厚岸の各水産  
高校のほか、南茅部高校の栽培漁業科、戸井高校  
の無線科であり、対象生徒数は本年五月一日現  
在、全体で七九一名である。

実習船の年間運航日数は二四〇日ほどであり、  
若竹丸、北鳳丸には船長以下二七名、若潮丸には  
同一八名の職員が配属され、実習時にはそれぞれ  
四〇名、三〇名、二〇名の実習生が乗乗する。実  
習期間は本科の生徒が三か月、専攻科が一年三か  
月である。また、実習のための経費は年間約五億  
円、収入は一億二、三、〇〇〇万円である。なお、  
実習に際しては、生徒の健康維持に最も意を用い  
ているとのことであつた。

5 北海道立五稜郭養護学校

本校は、昭和三十一年から実施された訪問指導や  
昭和三五年に設置された養護学級を基盤に昭和五  
四年養護学校教育の義務制施行に伴い、病、虚弱  
児童生徒を対象とする養護学校として発足した。  
校舎は社会福祉法人厚生院・函館五稜郭病院に  
隣接し、狭い敷地(約四、五〇〇㎡)を有効に活  
用して建設されている。病室と学校とは三階の上  
空通路で連絡しており、通学の便が図られてい  
る。児童生徒数は小学部九学級四一名、中学部三  
学級二一名の計一二学級六二名である。安静度別  
では、安静度二「床上学習」二時間、食事・洗  
面排便自立」の者が六名、同三「教室学習」三  
時間、一部床上学習、他はベッドで安静が一名、  
同四「教室学習四時間、体育、養訓、散歩は不可」  
が四名、同五「教室学習五時間、体育は不可」  
が五名、同六「教室学習六時間、留意は扱」  
が三名となつてゐる。また出身地別では、函館  
市内が三三名、その他の渡島支庁管内が一七名、  
隣接の松山支庁管内が一〇名である。

過去五年間の卒業生四一名の進路状況は公立高  
校進学二一名、私立高校進学一一名、各種学校進  
学一名、職業訓練校入校二名、就職一名、自宅静  
養三名、再入院二名となつてゐる。

児童生徒の病種は、さまざまだが、最も多いの  
は、気管支喘息(二四名)であり、このため治療  
効果を高めるように、これら児童生徒については  
できるだけ保護者から分離する方向をとり、面接  
は週一回程度という事で対応している。さらに  
喫煙は職員室の一角でしか認めぬという全校禁煙  
方式を実施したり、三年前からは金管楽器を取り  
入れた肺機能訓練を行うなどの対応をとつてい  
る。また最近の特徴としては、心身症に起因する  
障害が増加してきているが、「治療も教育の一部  
である」との考え方に立つて個々の症例に応じた  
きめ細かな対応に努めているとのことであつた。

本校では全般的な指導方針を次の三つに置いて  
いる。第一に病棟に帰ってからの指導を重視す  
る。このため退職教員二名を指導員として病棟に  
配置するとともに毎日数名のボランティアの協力  
を得ている。第二に自己教育の意欲を養う。第三  
に健康の自己管理能力を高めることである。

説明聴取の後、面会室、理科室、談話コーナー、  
技術室、体育館、図書室などを視察したが、体育  
館は床を木製にしたほか、空気を清浄化するとも  
にも暖房効率を高めるために対流方式が取り入れ  
られ、また図書室にはテーブル、椅子のほか畳敷  
も取り入れられるなど、障害児に対する暖かい配  
慮がうかがわれた。また教室と病室とを相互に画  
像と音声とで結ぶテレビカメラが備えられてい  
るが目を引いた。

〇高等教育関係

1 函館工業高等専門学校(国立)  
本校は昭和三十七年四月、機械工学、電気工学、  
土木工学の三学科でスタートし、その後四一年度  
に工業化学科が増設され、今日に至つてゐる。  
本年五月一日現在、在学者は七七五名で、うち  
女子は三一名である。出身地域別では函館市内が  
四一九名、その他道内が三五三名、他県が三名(青  
森県二名、千葉県一名)となつてゐる。  
なお、五五年度からは推薦入学(各学科定員の

の約二割)が行われ、このため在学者は増加して  
いる。また、この年度から、専攻科制を導入する  
こととなつてゐる。専攻科は、機械工学、電気工  
学、土木工学の三つである。この専攻科制は、専  
攻科の特色を生かすことと、学生の進路を明確に  
することとが目的である。また、この年度から、  
専攻科制を導入することとなつてゐる。専攻科は、  
機械工学、電気工学、土木工学の三つである。

二割)及び四年次への編入学制度が実施され、特に編入制度は工業高校の生徒たちのよい刺激となつてゐることである。

本年三月の卒業生は各学科とも就職希望者全員の就職が決定している。うち、資本金一億円以上の企業への就職者が七三%、公務員中級試験合格者が八、三%を占めている。また、地域別にみると函館市内が一〇名、その他の道内が二〇名、本州一〇三名となつてゐる。このように、就職状況が良好な理由については、実験、実習教育により、入社後の訓練がしやすいということが評価されているためである。

一方、進学者は北海道大学一名、長岡技術科学大学三名、豊橋技術科学大学四名となつてゐる。本校では、臨床型の実践的技術者の養成をめざし、実験、実習、実技、語学を重視した教育を行つてゐる。また、同時に「技術を扱うのは人間である」との考えから、人間教育の重要性にも十分配慮しており、この結果、昨年度卒業生は二一名が皆勤賞、一七名が精勤賞を得るなど、まじめな学生が養成されてゐる。

また、今後公開講座の充実、函館テクノポリスへの分担、協力、外国人留学生の受入れ拡大などに努めていきたいとのことであつた。

なお、次の事項について要望がなされた。  
(1) 本校に情報工学科を増設してもらいたい。  
(2) 本校からの進学者の受け皿となつてゐる長岡、豊橋の技術科学大学に、工業技術教育の教員養成のためにも博士課程を設置してもらいたい。

(3) 道内にも技術科学大学を設置してもらいたい。

説明を聴取した後、調査班は総合視聴覚教室を視察した。本教室では同一の教材を用いながら学生一人一人がVTRを操作して自分に適したペースで学習することができ、一方教官はVTRモニターにより、一人一人の学生がどのようにVTRを操作して学習したかを時系列的に把握することができ、また、学生自身の声をビデオテープに

録音して発音チェックをすることを可能にしたことも大きな特徴である。このような教育システムは他に類を見ない独自のものとされており、よりよい教育方法の追求にかける本校の熱意の一端がうかがわれた。

### 2 酪農学園大学(私立)

本学の歴史は、土地を生かす(殺さない)農業に努めるべきとの健士健民思想に基づき、酪農による寒地農業を確立して北海道農業の再興発展を図ることをめざした黒沢西蔵氏を中心に昭和八年に設立された北海道酪農義塾に源を発する。その後、一七年に野幌機能学校(二三年に高校に改組、五九年酪農学園附属高等学校と改称、二三年に通信教育酪農科(のち酪農学園短期大学酪農学科と改称)、通信制各種学校、二五年に酪農学園短期大学(酪農科)、三三年に同女子高等学校(三五年三愛女子高等学校と改称)、三五年に同大学(酪農学部酪農学科、のち農業経済学科、獣医学科を増設)、五〇年に同大学院がそれぞれ設置され、高校、大学を通じての一貫した酪農教育によつて、わが国酪農の振興発展に寄与してきた。

特に最近においては、大理石状の紋様の現れる「ワインチーズ」を開発して、近隣の農村にその技術の普及を図り、道の進める一町村一産物運動に貢献してゐることである。

本学の教育の特色は「実学教育」と、神を愛し、人を愛し、土を愛するという「三愛精神」にあると言えよう。まず、前者に関しては附属農場における酪農実習を重視するとともに、大学、短大の二年目の夏期休暇中二〇日間、農家に宿泊しての委託実習を実施し、附属農場では休得できない農民、農家、農村の実態に触れさせることとしてゐる。また、後者に関しては、キリスト教を必修とするとともに、夏期には週三回、冬期には週四回、学生のために礼拝の時間を設けてゐる。

なお、短期大学においては、近年女子学生の入学が増加していることを配慮し、六〇年四月開設をめざして女子教養学科増設を申請中である。これにより、技術面ばかりでなく、教養面も身につけた女子を農村に送り込むことをめざしたいとのことである。

次に、本学の就職状況は極めて良好で毎年就職希望者は一〇〇%の就職率をあげてゐる。五八年度卒業生の進路は、酪農学科では農業一七、九%、製造業二九、五%、卸小売業一四、四%、サービス業一八、五%、公務員六、四%、その他二、三%、進学等一一、〇%、農業経済学科では農業三三、四%、製造業一八、六%、卸小売業二二、五%、サービス業一〇、八%、公務員五、九%、その他三、九%、進学等四、九%、獣医学科では、農業一、六%、製造業一〇、五%、保険業一四、五%、サービス業四六、八%、公務員二、六%、進学等四、〇%、短大では農業五〇、九%、製造業七、七%、卸小売業六、五%、サービス業六、五%、公務員一、三%、その他三、二%、進学等二、三、九%となつてゐる。

農業教育の展望に関しては、農業の将来への疑問を抱く学生が一方、サラリーマン家庭からも農業に実際に取り組みたいという学生も出て来ており、大学としても産業、社会の変動に対応できる技術の開発等を迫られてゐることである。

○社会教育、体育・スポーツ関係  
1 北海道立洞爺少年自然の家  
本施設は洞爺湖畔という恵まれた大自然の中で集団宿泊生活、野外活動、自然観察などの体験を通じて、少年の豊かな情操や社会性を培い、たくましい心身の育成を図ることを目的として、昭和四八年に設けられた社会教育施設である。

敷地は道有地(二五、六五九㎡)及び洞爺村からの借用地、使用承諾地(九三、八二〇㎡)の計一一九、四七九㎡で、うち庁舎敷地は八、二五八㎡である。施設としては宿泊室(一五室、定員二〇〇人)、つどい室、談話室、体育館、浴室、食堂のほか、屋外施設として運動の広場(一七、四〇㎡)、緑の広場(六、三〇〇㎡)、第一、第二営火場が設けられている。また、設備として各種の体育用具、音楽用具、及び視聴覚用具が備えられ

てゐる。なお、今後ひょうたん、ひめりんご等自然物展示に取り組みたいとのことである。

職員は所長以下二二名であるが、うち一三名(庁舎管理業務七名、食事提供業務六名)は委託職員である。

事業は当施設が企画した活動計画に個人が参加する主催事業と、利用団体と当施設とが事前に協議して定めた活動計画に基づいて実施する受入れ事業とがある。

主催事業としては、「利用団体担当者研修会」「夏の洞爺を楽しむ親子のつどい」「とうやオリエンテーリング」「歩くスキー親子のつどい」「チャレンジャーズのとうや」といった企画が一泊二日または二泊三日で行われている。受入れ事業としては、自然教室等多彩な事業が平均七〇〇八〇人の規模で実施されている。期間は一泊二日が五二%、二泊三日が四二%と短期のものが多いが、これは、家庭環境的要因(過保護)も影響していることである。今後、事業の効果を上げるために、利用団体との間に緊密な連携、協力体制を作ることが重要となつてゐる。また、近年学校サイドの利用が増え、セカンド・スクール化の傾向が出てきてゐるので、教科指導に連動させる工夫をすることも必要になつてきたとのことである。

昨年度は利用団体二一五、延泊者数一九、七一四人である。利用は夏期に集中する形となつてゐるが、折衝で時期をずらしてもらえばほぼ希望に対応できる状況であるとのことである。

なお、施設整備を推進するとともに、人員面について学校に準じた措置を講じてもらいたい旨の要望があつた。

### 2 北海道開拓記念館

本記念館は、開道一〇〇年を記念して昭和四六年、札幌市の野幌森林公園内に開館した地上三階、地下二階の歴史博物館であり、常設展示室のほか、特別展示室、収蔵陳列室、講堂、体験学習室、収蔵庫などが設けられている。常設展示室には「北の夜明け」「先住の人びと」

「新天地を求めて」「開けゆく大地」「産業のあゆみ」「北のくらし」「新しい北海道」という七つのテーマに分けて北海道の生い立ちから開発の歩みを示す各種の資料が展示されており、その展示内容について、さらに詳しく調べたい人のために、収蔵陳列室が開放されている。特別展示室では年数回、二、三週間にわたって、さまざまなテーマに関する特別展示が行われている。調査班が訪れた際には、アイヌ民族の衣生活についての「アイヌの装い」展が開催中であった。

体験学習室には、藁細工、竹細工、伝統遊具、農具、粉ひき、紡毛、野鍛冶などのコーナーが設けられており、来館者が直接手を触れ、あるいは操作することにより、昔の人々の生活を体験できるようにになっている。

また、本記念館では講演会、講座、バス見学会、森林観察会、講習会、映画会などの行事を開催している。

なお、館内には一〇人の解説員が配置されて来館者への応答に当たっているほか、約三〇〇人の学芸員、研究員が各分野の専門的な調査研究を行っている。

本記念館への昨年度の入場者は約二万三千六百六十六人、〇〇人にのぼったこととあり、道民に親しまれつつ社会教育の実をあげている様子がうかがわれた。

3 虻田町立火山科学館

昭和五十二年の突然の有珠山大噴火は、虻田町に甚大な被害をもたらした。当館は、この自然の力の脅威を記録に止め、自然と人間との調和を考えるために作られた社会教育施設である。

入口正面には、火山礫の直撃を受け、傷だらけとなった町長公用車が被災当時のままの状態に展示され、噴火の激しさをしのばせていた。

また館内は、「有珠山噴火」「めくまれた自然」「有珠山のおいたち」「突然の地震」「火山への招待」「私達と有珠山」という六つのテーマごとに火山礫や火山灰、枯死した木などの実物やパネル写真、模型などが展示されているほか、三五〇人収容の体験室では、洞爺湖、有珠山周辺の地形模型と立ち昇る噴煙の大パノラマが、光とウィーハースピーカー一六台による音響とで噴火の模様を再現し、大スクリーンに「有珠山噴火の記録」火を吹く日本列島」を放映している。

本鏡技場は、昭和四五年、旧大倉シャントエを改修して建設された東洋一のジャンプ場であり、札幌オリンピックビッグ大会時に九〇m級ジャンプ競技が行われた。

全長四四〇m、標高差一三七m、最大斜度三九度であり、ジャンプ台のスタンド部分はアプローチと一体の鉄筋コンクリート造りで、頂上のスタートハウスから一、二カ所の各スタート台へ容易に導くことができる世界に例のない方式がとられている。収容観客数は約五万人であり、一般観客席のほか、審判台(鉄筋三階建)、運営本部(同四階建)及びロイヤルボックス(二、三〇人収容)が設けられている。

また、五七年には国等の補助を受けてリフト(総工費一億七、六〇〇万円)が建設され、山頂までの所要時間が従前の二〇分から四分に短縮された。

なお、山頂展望台からは札幌市街が一望でき、市民の憩いの場としても活用されている。

文教委員会委員派遣第二班(兵庫県)調査報告書

一、派遣目的 教育、学術及び文化財の保護に関する実情調査

二、派遣委員

- |    |      |
|----|------|
| 理事 | 田沢智治 |
| 理事 | 吉川春子 |
| 委員 | 世耕政隆 |
| 委員 | 中村哲  |
| 委員 | 高桑栄松 |
- 三、派遣地 兵庫県
- 四、派遣期間 昭和五十九年一月二日(火)～四日(木)
- 五、派遣日程

月日(曜)	発地	着地	視察箇所	宿泊地
一月二日(火)	東京	神戸	兵庫県庁(県勢及び教育概況の説明聴取) 兵庫県立西宮高等学校 神戸市北野町山本通伝統的建造物群保存地区(異人館)	神戸
一月三日(水)	神戸	姫路	兵庫教育大学 兵庫県立姫野台生涯教育センター 兵庫県立歴史博物館	姫路
一月四日(木)	姫路	東京	神戸大学教育学部附属幼稚園	姫路

六、調査の概要

〇県勢、教育事情及び要望事項

県当局、教育委員会関係者から概略以下のよう  
な説明及び要望が行われた。

1 県勢

本県の総面積は八、三七六km<sup>2</sup>(全国の二・二%)  
第一位)で、二一市二〇郡七町に分かれています。  
本州では両端の県を除き南北が海に面している  
一の県であり、中国山地がやや北寄りに東西に横  
断しているが、南部が肥沃な播磨平野となつてひ  
らげ温暖であるのに対し、北部は日本海傾面を形  
成して肥沃に乏しく、降水量が多い。

人口は五、二二九、五〇〇人(全国総人口の四・  
四%)で県全体の人口増加率は伸び悩みの傾向に  
あるが、市部の人口が八四・四%を占める(昭和  
五八年一月一日現在)。神戸市など大都市への  
人口、産業の集中が鈍化する一方、その周辺部や  
地方中心城市への集積が徐々に進んでおり、三〇  
年代から始まった過疎地域の人口流出現象には歯  
止めがかかるとならず、県内における人口の偏在  
傾向は以前に増して深刻になりつつある。

就業構造は、第一次産業四・二%、第二次産業  
三七・五%、第三次産業五八・一%(五七年)とな  
つており、一人当たり県民所得は一、七六九、  
〇〇〇円で、全国平均一、七九四、〇〇〇円とは  
ほぼ同水準にある(五六年度)。

財政力指数は五七年度〇・六九一六四で、全国  
順位は第七位である。

2 教育事情及び要望事項

五九年度における本県の一般会計予算額は九、  
一七九億八、六〇〇万円であり、うち教育関係予  
算額は三、一五八億九、四〇〇万円で三四・四%  
を占めている。行財政改革の下での事業見直しな  
どにより、予算総額の伸び率は一・二%と三一年  
度以来の低いものとなったが、教育関係では教職  
員定数増などに特に意を用いている。

兵庫県は、現在、最大の政策課題として、目下  
実施中の生活文化社会計画の基本理念を堅持しつ  
つ、新たに二〇〇一年を目標とする一五か年間の  
具体的施策と行動指針を明らかにする「兵庫二〇  
〇一年計画」の策定を進める一方、これまで推進  
してきた「教育文化を高める」「健康を増進し、  
福祉を高める」「産業を振興し、雇用を安定する」  
の三大立県課題の達成のため、今年度は特に、  
①全県全土公園化構想の推進 ②健やかな家庭と  
健康・福祉社会の実現 ③多様で弾力性ある教育  
システムの創造、④地域の活力基盤の整備の四領  
域に重点を置いた諸施策の実施を図っていること  
である。

次に本県がかかっている教育行政上の主な課  
題及びそれにとりまう国に対する要望の概要は以  
下のとおりである。

(1) 高校進学者急増対策

県内の中学校卒業生数は、ヒノエウマの年に  
生まれた生徒が卒業した五七年の六三、八四八  
人を底として急増に転じて五八年は一気に一  
二、三五一一人増の七六、一九九人となつており、

以降六四年まで増加し続けて八八、五〇〇人に達したのは再び減少に転じ、六九年には、六九、〇〇〇人となる見通しである。高校進学率はほぼ全国平均並みの九四％台で推移しているが、人口集積にともなう都市周辺部における高校新増設が緊急にして最大の課題となっている。これに対処するため、五八年度五校、五九年度三校（神戸市、明石市、播磨町）の県立高校を新設したほか、五八年度からは学級編制を四七人とするなどの措置をとっているが、六四年のピーク時を乗りきるためには今後もさらに六〇年度二校（宝塚市、姫路市）、六一年度二校の新設が必要とされている。また、県内二二二校中五〇校は私立高校であるが（五九年度）、県、私学、市町村関係者で構成する急増対策会議の決定に基づき、急増分については現状の公立八対私立二の割合で分担することとして私学に協力を要請しており、今後三校の私立高校新設が予定されている。

一校の新設には二〇億円の事業費が見込まれており（阪神間では三〇億円）、この財政負担を軽減するため、国に対し、高校新増設に対する国庫補助事業量の十分な確保と六〇年度までの時限的措置である公立高校新増設建物補助の延長、さらには用地取得に対する国庫補助制度の創設について強い要望がなされた。

(2) 特色ある高校教育の推進  
本県では、五七年度の高校新学習指導要領の実施に先立って、習熟度別学級編成の導入をはじめとして五三年度から特色ある高校教育の推進に取り組んできている。

まず、従来の高校教育では、専門教科や科目を多く学び、その知識や技能を生かして進路を考えようとする生徒には不十分な面があることから専門学科の新設を望む声が高まってきたことを背景として、五八年度に普通高校に音楽科と美術科（趣旨・目的：芸術に興味を持つ生徒に実践的教育を行い、芸術文化の発展に寄与する人材育成を図る）、国際文化科（毎年数百名

にのぼる帰国子女の教育を充実し、国際関係、語学関係志望の生徒に専門教育を行い、その相互啓発を通じて国際性豊かな人材育成を図る）、商業高校に情報科学科（情報化社会に適應する技術・知識を習得させ、コンピュータ等に関する専門的能力の伸長を図る）の計四学科を設置した（各一、二学級）。六〇年度以降はさらに普通高校に英語科、理数科及び演劇科、職業高校に電子機械科と情報科を新設する計画を進めているところであるが、たとえば英語科においては、総合英語、外国事情などの科目を普通科の英語の授業時数の倍に相当する週一二、三時間設定するなどユニークな内容を予定している。また英語科と理数科については、機会均等の見地から今後、県下全一五学区に設置することが検討されている。

五八年度新設の四学科の入試は全県学区で行われ、推薦によることを原則として、面接等による適性検査で選抜を実施しているが（競争率は平均三倍程度）、二月上旬を選抜時期とし、不合格の場合は一か月後の一般入試の再出願が可能となるという二回の受験機会を与える措置を講じている。また、卒業後の進路については予測し難いが、新設学科においては、大学進学にも支障のない教育課程を編成しているということであった。

これら高校における専門学科の設置は、本県の重点施策である「児童生徒の適性と能力を伸ばし、創造性豊かな人格形成を目指す多様な教育システムの創造」の中心をなすものであるが、高校教育の画一化による弊害が指摘される今日、先駆的な試みとして注目し得るものといえる状況の下で、一方では大量の高校中退者が出ており、生徒の個性、能力への多様な対応は緊急の課題であるとの見解が強調されていた。なお、音楽科、美術科、演劇科、書道科等の芸術学科の設置については、施設・設備等多額の経費を要するため、国において新たな補助

制度の創設について検討されたいとの要望があった。  
そのほか、特色ある高校教育の推進のための事業として、①吹奏楽、バレーボール、ボランティヤ活動など校風を培う文化・体育クラブ及び部活動の育成、②郷土伝統文化の保存・継承活動を通じて地域文化への貢献、③地域に密着した研究を行うことなどによる特色ある職業高校づくりの三テーマについて、それぞれ推進校を指定して積極的な教育活動を行っているところである。

(3) 高校入学者選抜制度・方法の改善  
本県の公立高校入学者選抜制度・方法は、調査書と思考力検査を重視するなど独自の内容で四三年から実施され、いわゆる「兵庫方式」として注目を集めてきたところであるが、文部省の高校入試方法改善検討会における検討と並行して、県教育委員会の高校入試改善プロジェクトチームにおいて、①高校の多様化、特色化とそれに伴う生徒の学校選択の自由の拡大、②中学校教育における生徒の基礎学力の充実と個性の伸長、③中学校生徒の進路意識の発達段階及び高校のもつ地域性に応じた配慮、などを改善への基本的視点として検討を進めた結果、六一年度入試から現行方式を大幅に改善する方針が決定された。

まず選抜制度については、現在、普通科において学区ごとに実施されている総合選抜（尼崎、伊丹など）、単独選抜（神戸など）、連携校方式（北但、南但）の三種の選抜方法は、いずれの制度にも長短があり、すでに定着して地域の特長、歴史的な経緯があることなどから、これを統一することなく当分の間継続することとされている。また、高校教育の多様化、特色化にともなう学科新設については、現在までに設置され、または設置が決定されている学科以外のものについても、生徒の志望、地域の実態等を勘案しながらさらに推進するものとしている（前項参照）。

改善されることとなった「兵庫方式」といわれる選抜方法は、中学校教育が高校受験の予備校化しているとの反省のもとに生まれたものであり、あくまで調査書を主資料とし、九教科の枠を超えた思考力検査を参考資料として合否判定を行うものとしてスタートしたが、五二年度入試以降段階的改善を経て、現在は、原則として調査書を主資料とし、当初より教科別色彩の強い学力検査（教科名は明示しないが九教科の教科内容を対象とした六つの検査）とあわせて合否判定を行うが、調査書と学力検査との間に著しい差のあるものについては適当な比率を定めて判定するという内容となっている。

今回の改善は、学力検査について四五都道府県で実施されている国・社・数・理・英の五教科テストを導入するとともに、調査書と学力検査の比重も同等にするなど事実上「兵庫方式」を廃止しようというものである。その理由としては、①中学校、高校双方に生徒の基礎学力低下がみられる、②調査書の学習評定で「輪切り」されることによつて進学高校が決まり、愛校心や学習意欲がなくなる、③中学校の最後の学期が形骸化していることなどが挙げられているが、他方では、この改善は中学校教育を再び受験準備教育に巻き込むことになるのではないかと懸念もあり、いずれにせよ、本県における高校入試改善の経緯は、教育改革論議にも少なからず示唆を与えるものであらうと感じた。

(4) 生涯教育事業の推進  
本県は学校教育のみならず、県民が自ら学び続ける自己教育力を培い、学習社会に応じた弾力的教育システムを家庭、学校、地域の連帯のもとで開発するため、現在、教育委員会、知事部局をあわせて二〇〇余の生涯教育事業を計画、実施している。五八、五九両年度においては生涯教育における県と市町村の機能分担について調査をすすめており、生涯教育の体系化を目標としているところである。  
社会教育施設、社会体育施設関係では、六〇

年夏に開催されるユニバーシアード神戸大会を控えて一段と高まる県民のスポーツ志向に依りて県立総合体育館(西宮市)、県立文化体育館(神戸市)が建設中であるほか、各市町村においても公立体育施設等整備の要請は一層強まっております。国において、事業予算の確保と国庫補助額の引上げが図られるよう要請を受けた。

(5) その他の説明及び要望事項

教員の資質向上のための研修事業としては、新任教員の宿泊研修、管理職研修、小・中・高校教員を対象としたカウンセリング研修のほか、保健体育担当教員の研修では、実技に加え、学校教育全般の中で体育活動のあり方を考える体育経営理論の充実を図っている。

また、青少年の健全育成・非行防止のため、青少年育成特別実践地域として県下二四地区を指定するほか、少年柔剣道教室の強化、警察と住民のパイプ役をつとめる少年警察協働員の配置などをすすめている。

地域改善対策事業の対象は、三四七地区一五万人あまり(五〇年調査)で全国一となつていますが、学校教育においては、小・中・高あわせて七〇〇名の推進教員を標準法に上乘せして配置するほか、四一年度から、能力をもちながら経済的理由で進学できない生徒、学生に対して、奨学金や通学用品等助成金(入学時)の給付、貸与などの施策を行ってきた結果、当初の高校進学率は全県平均七四・三%に対し、対象地域四七・〇%であったものが、五八年度には九〇%近くまで上昇している。また、現在、学校教育や社会教育の場では人権思想の普及高揚を図ることが最も重要であるとの見地から、「差別をなくそう県民運動」推進協調月間の設置、県立のじぎく会館における指導者養成、五四年度には全国初の市町に対する啓発活動補助制度の創設などを行うほか、資料、映画、スライドなどの制作、講演会の開催などの諸事業を積極的に推進して、残された課題の解決に取り組んでいるところである。

以上のほか、国立健康科学大学の創設準備の着手、重度重複障害児を対象とした西日本における中核的な治療教育施設としての国立兵庫教育大学附属養護学校の設置などについて要望を受けた。

○県立西宮高等学校

西宮市北部の文教地区に位置し、大正八年創立(兵庫県武庫郡西宮町立西宮商業補習学校)の、普通科、商業科、音楽科の三学科(生徒数一、三二二人)からなる伝統校である。

校長以下学校関係者から次のような説明があった。

本校は、県教育行政の重要施策である高校の多様化・特色化の課題を担った三科総合制高校として特色ある教育の推進を図っているところである。編成上の特色は、各学科ごとにそれぞれ異なる通学区域、入試選抜の時期と方法、教育課程で編成していることであり、普通科(一学年七学級)は西宮、宝塚両市を通学区域とする総合選抜、商業科(一学年二学級、商業専門科目三五単位)は西宮市と宝塚市の一部を通学区域とする単独選抜、五八年度新設の音楽科(一学年一学級、音楽専門科目三〇単位)は県下全域を通学区域として推薦、実技・適性検査による選抜によってそれぞれ編成されている。

五八年度卒業生の進路については、大学進学率が六八・〇%でその八割以上が私立大学・短大に進む一方、就職状況も金融・保険業、製造業を中心に就職率一〇〇%と良好である。

注目される音楽科(設置に至る経緯は県教育事情の項で触れた)は、現在二年まで学年進行しており在籍数は七九名(定員八〇名)で男子は三名のみである。ほぼ県内全域から生徒が集まっているが、やはり神戸、西宮の大都市を背景にして成り立ち得る学科ではないかと考えられる。専攻別ではピアノの五八名が圧倒的に多く、以下バイオリン、声学、フルート、オーボエなどとなっている。専用の音楽校舎は本年一月に完成し、練習室一二、レッスン室八、ソルフエージュ室、合唱室、

合奏室などが、個人レッスンを中心とした学習活動が円滑に行われるよう合理的に配置されており、グラランドピアノ三五台を始め各種楽器、音響装置、冷暖房設備等を備えている。教員は専任三名と二八名もの講師で対応している。

○神戸市北野町山本通伝統的建造物群保存地区(異人館)

いわれる異人館と呼ばれるかつての外国人住宅地の町並みは、神戸市の山手の見晴らしのよい緩やかな南斜面一帯にある。

慶応三年(一八六八年)の開港後、神戸市内には、二五ha以上に及ぶ外国人居留地が設けられ、英国人技師によってヨーロッパの小都市を思わせる町並みが形成された。明治に入って、北野町一円は、居留地の商館街と異なつて住宅地として注目され、神戸市制が制定される明治二二年前後から発展して二〇〇棟以上の異人館と和風住宅

によって独自の雰囲気をもつ町並みとなった。しかし、第二次大戦によって海岸沿いの居留地の七〇%、これら異人館の過半数が焼失し、さら

にその後も高度成長を反映したマンションブームや老朽化による解体、移築保存が相次ぎ、現在は洋館二八棟と伝統的和風邸宅八棟が残っている。主な洋館として風見鶏の館(旧トーマス住宅、重文指定)、白い異人館(旧シャープ住宅、同)、ライ

館の特徴は、一つ一つの建物の意匠や色調が全部異なっているばかりでなく、ペランダ、張出し窓、下見板張りペンキ塗り、よい戸、屋根の赤れんが化粧積層など異人館を特徴づけるそれぞれの意匠が、当時の外国人建築家の手になるものだけに非常に水準の高いものであるということである。

以下、保存の現状についての神戸市教育委員会の説明では、五三年一〇月の市都市景観条例の施行に伴い異人館のある一帯九・三haを重要伝統的建造物群保存地区に選定するとともに、周囲との異和感を防ぐため、それをとり巻く北野町の三二haを景観形成地域として指定し、地域内の特殊な建物などの新・改築、大規模な模様替などについて届出を義務づけ、必要な助言、指導ができることとした。また、五三年以降三億二、九〇〇万円(一部国庫補助)を投入して風見鶏の館とライ

ンの館の買収、整備をすすめて、保存に万全を期すとともに公開活用を行っている。さらに、五五年には、洋館を中心とした住宅としては初めて国の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、それに伴う修理、修景等の事業は現在まで一億三、八〇〇万円(国庫補助二分の一)に及んでいる。

現在九棟が公開されており(民有のうち五棟は有料、一か月に多くて一〇万人、少ない月でも三万人以上の入館者を数えるが、市では、公開に伴う維持運営費(累計約一億九、〇〇〇万円)のほか、地域内の道路・公園整備、民有棟の修理などに対する市単費の助成、保護団体の育成などの諸事業を積極的に進めているところである。

○兵庫教育大学

新教育大学構想は、「教員研修の改善充実を図



るための施策として研修体制の体系的な整備、現職教員の研修を目的とする新構想の大学院の創設—を内容とする四七年の教育職員養成審議会の建議に始まっており、本学創設の趣旨・目的も、今日教員には専門職としての高度の資質能力が強く求められているという社会的要請があるとの認識に立って、主として現職教員の学校教育に關する高度の研究・研鑽の機会を確保する大学院と初等教育教員を養成する学部を置き、全体として、学校教育に關する理論的、実践的な研究・教育を進める教員のための大学、学校教育の推進に對して開かれた大学となることを目指している。

この趣旨をふまえ、大学院においては、入学定員の三分の二程度は初等中等教育における三年以上の教職経験を有する者をもって充てることとし、五七年度の学部学生受入れに先立って、五五年度から学生の受入れを行って、五九年五月現在の学生数は学部六一五名(定員六〇〇名)、大学院四九四名(定員六〇〇名)であり、大学院学生のうちの四一四名が現職教員、九名が教職経験者である。教官組織は第一部から第五部に分かれて(一)講座、教職員数は三二六名となっている。

附属施設としては、図書館、幼・小・中の附属学校、学校教育研究センター(学内共同施設)、学部附属実技教育指導センター、保健管理センターがあり、学生寄宿舎は、単身用六棟(女子用一棟)と世帯用四棟に五九〇名が入居している。学長、副学長、事務局長から、大学の現状と特色、今後の課題、要望について以下のような説明があった。

大学院修士課程の現職教員の出身は全都道府県にわたっているが、志願率は当初より若干下がって一・一倍から一・二倍となっている。上越教育大学と鳴門教育大学(五六年一〇月設置)ではすでに定員を下回る現象がみられるが、このことは、設置当時議論された志願に際しての都道府県教委の同意の是非や幹部教員養成につながるのではないかという教育現場の反対という問題より、現在全国で約七〇〇名といわれる都道府県の研修

定員が財政難のためほとんど増えないということにネットクになっていると考えられる。このため、今後は三教育大学がそれぞれの特徴をもちつつ連携、調整を図る必要も出てくるであろうとのことである。在学生の教職経験年数は、三年以上一〇年未満二〇〇名、一〇年以上二〇年未満一五六名、二〇年以上二八名であり、最高年齢は五四歳である。クラブ活動や寮生活を通じた学部学生との交流も多く、相互に好影響を与えている。過去三回の卒業生に対する評価は概ね好評であり、期待に沿う活躍をみせているとのことであった。

教育課程としては、専門を深めるだけでなく教師としての資質を高めることを重点に、全三四単位のうち八―二単位は全領域にわたって修得する一方、課題研究(六単位)では、学生が教育現場から持つてくる研究課題を材料に教官と研究を進めるといふ現職教育にふさわしい方法をとっている。このため、研究分野もできうる限り学際的、総合的なものになるよう講座構成も配慮されている。ただ、やはり、「教え方」と「専門」にそれぞれ異なった興味をもつ現職教員を同時に教育する点での難しさがあるとのことであった。

教育実習については、学部、大学院とも一年から実施し、一般の教員養成大学の倍以上の内容(学部で一四―一五単位必修)としているが、現在、附属学校以外の近接校にも協力を求めているところである。

本学のある社町(人口約一七、〇〇〇人)には現在、大学に隣接する県生涯教育センター、県立教育研修所などの教育施設、工業団地などがあるほか、先端企業の進出も決まって、町当局も産学住一体の学園都市、北播磨の中核としての発展を図っており、大学側も公開講座を積極的に実施するなど地域にも開かれた大学となるための努力を続けている。さらに国際交流面でも現職教員を含む留学生受入れ、姉妹校提携などを推進しているとのことであった。

士課程は置かれていないが、教員の指導的役割を果たす人材養成の必要と教育学の理論構築という社会的要請の見地から博士課程の設置を切望しており、学部の学年進行が完了する六〇年度以降の実現を目指して学内で研究を進めているところであるが、早期に創設準備に入れるよう協力を要請された。

説明、意見交換の後、検索システムが完備した図書館、予想以上に書籍なども豊富な売店などの学内施設を視察した。

○県立嬉野台生涯教育センター  
本センターは、兵庫教育大学に隣接する標高一五〇mの松林に囲まれた丘陵地にあり、総面積は四三四、五〇〇㎡、甲子園球場の二倍という広さである。本館(婦人研修館)、成人宿泊棟、青少年宿泊研修館、学習交流棟、体育館、青少年集会所兼食堂、体験工作棟などの建物と、野外施設として広場、グラウンド、テニスコート(四面)、キャンプ場、「思索の森」(散策コース)、「冒険の道」(アスレチック用具配置)、「冒険の小川」(延長三〇〇mの人口の川で魚を放流)などが配されている。

所長等から次のような説明があった。

本センターは、兵庫県の生涯教育推進体制の中核となる施設として構想され、設置及び管理に関する条例に基づいて五四年七月に開館した(建設費約五五億円)。その機能として、①各種施設、備品などの「場の提供」、②青少年、一般成人、婦人、高齢者を対象とした講座開催など「機会の提供」、③学習プログラム相談、学習情報データなどの「情報の提供」、④市町村社会教育関係職員、ボランティアの研修、を掲げており、年二回の運営協議会で事業計画を決定し、五九年度は主要なものだけで三二の事業が実施されている。年間予算は二億一、一七九万円(うち事業費一、三五六万円)を計上している。

特徴的なものとして、サバイバルキャンプ(体験学習)は、テントを使わない野営やハシも自分で作るなどの内容で実施し、老人大学卒業生が協

力することによって世代間の交流が効果的に行われていること、サマースクール等を通して異地域に住む青少年の交流が進むとともに、研修経験者がそれを生かしてボランティアとなるケースが多いこと、特に婦人研修館の事業は多彩であり、国立婦人教育会館の西日本版と自負していることなどが挙げられていた。

五八年度の利用状況は、延べ一六八、五三八人のほり、青少年宿泊棟では一年前の予約を必要とするほどの盛況であり、大阪府を中心とした県外利用者も、青少年六・五%、婦人九・三%、成人(宿泊棟)二二・三%となっている。

今後の課題としては、市町の生涯教育事業との連携、情報提供機能の面でのニューメディア時代への対応の必要性などが挙げられたが、委員からは、国の施策ともあわせて、今後の生涯教育事業は、青少年中心、趣味中心に片寄ることなく、職業教育なども含む全世代にわたるものとして推進されるべきであろうとの意見が述べられた。

○県立歴史博物館

兵庫県は、摂津、播磨、但馬、丹波、淡路の五つの地域が、それぞれ郷土色豊かな文化を育ててきた多彩な歴史を有している。本博物館は、教育文化立県構想の一環として、姫路市の中心、姫路城のすぐ隣の好環境の地(市有)に建設され、五八年四月に開館したばかりである。

地下一階地上二階建て、延床面積七、四六六㎡の建物は、すべての流れが姫路城に向かう形で設計されており、展示構成は、兵庫の歴史、姫路城を中心とした城のすべて、県内各地の生活文化などを紹介する常設展示と特別展示に分かれている(五九年度の特別展示は、「ふるさとのみほとけ―兵庫の仏像」)。はりまの名刹・法華山一乗寺の秘宝など。その他、ビデオライブラリーが設置され、各種の講座、講演会、鑑賞会が開かれており、全体の運営方針として、英雄などの著名な対象より、歴史を担った大衆を中心に据えることを主眼としているとのことである。

建設には約三四億円(国庫補助二億円)を投じ、

うち展示・資料関係には一億四、〇〇〇万円を  
かけている。五八年度観覧者の状況は、常設展一  
五五、二五五人、特別展は一二五日開館で八三、  
一七三人となっている。

○姫路城  
姫路市助役、同教育長、管理事務所長等から案  
内、説明を受けた。

姫路城が、播州平野の中心、姫山の上に初めて  
築かれたのは遠く南北朝の頃であり、一五八一年  
(天正九年)、羽柴秀吉が毛利攻略の根拠地として  
大改築した。その後四半世紀を経て、播磨城主に  
封ぜられた家康の女婿・池田輝政が一六〇一年  
(慶長六年)から八年の歳月をかけて完成したの  
が現在の五層七階の全容である。三の丸と西の丸  
は、二代藩主本多氏によって將軍の息女千姫を迎  
えるために整備されている。

天守は日本城郭建築最盛期の代表的遺構で大天  
守と三基の小天守を渡櫓で連結したいわゆる連立  
式天守であり、建物はすべて白亜の総塗籠であ  
る。昭和六年に文化財に指定され、現在は天守等  
八件が国宝となり、菱の門、備前門をはじめ約一  
kmに及ぶ土塀に至る七四件のすべての建物が重要  
文化財になっている。昭和九年度から国の直営事  
業として修理工事が始まり、第二次大戦をはさん  
で三九年度まで三十余年続けられた結果、往時の  
荘麗な姿をとり戻した。以後、管理を姫路市に託  
し、五〇年度以降は年間約三、〇〇〇万円(国庫  
補助事業)で屋根の葺替や漆喰壁の塗替などの部  
分的な修理を実施しているところである。

修理事業は保存技術の継承、技術者の養成とい  
う目的も兼ねているが、次第に人材の確保が困難  
になりつつあること、中濠以内は特別史跡に指定  
されているが、城周辺の土地の所有が国、市、県、  
民有に細分されていることもあって、景観維持の  
ための周辺整備には支障が多いことなどの問題点  
も聞かれた。

○神戸大学教育学部附属幼稚園  
本幼稚園は、明治三七年、明石女子師範学校附  
属幼稚園として開園した古い歴史を持ち、現在

は、同附属明石小学校・明石中学校とともに、明  
石市山下町にある。

学級編成は、三歳児から五歳児まで各二学級、  
三歳児は一学級一八名、四、五歳児は一学級三五  
名で編成して、三年コースと二年コースをつくつ  
ており、五九年度の園児数は一七七名、教職員は  
一四名となっている。教育実習生は五人が四週間  
ずつというスケジュールで受け入れられている。本幼  
稚園では、今日そのあり方をめぐって論議されて  
いる三歳児教育、幼小の連携などについて、かね  
てから実践的研究を続けており、その成果である  
「三歳から七歳までの教育課程」を公刊している。  
神戸大学教育学部長、園長(小・中学校を兼任)  
及び副園長等から次のような説明を受けた。

三歳児学級については、三歳児からでない幼  
児教育の眞の研究は不可能であるという見地から  
設置を切望し、兵庫県は幼稚園就園率が高く理解  
を得やすいという背景もあって四一年に実現し  
た。やはり「手がかかる」というのが実感である  
が三年保育と二年保育ではチームワークなどに明  
確な差が出てくる。また、教育が保育かという点  
については、子どもの個性や能力に応じて、結局  
はその子が最もラックスできる方法で対応する  
ことが最良ではないかと考えられる。

幼稚園と小学校の教育内容の接続について、委  
員からも、画一的な教科教育が幼稚園に入りこ  
み、マイナス面が大きいのではないかと指摘が  
あったが、研究の結果は逆に小学校に「遊び」を  
とり入れるべきであるというものであり、本附属  
学校の伝統的教育方針もあって、小・中学校にお  
いては「自由学習」「探究学習」など児童生徒の個  
性や自主性を重視した教育内容が工夫されている  
ということである。

また、最近の幼児のストレスの増加原因につ  
いては、母親の変化、具体的には、どう対応すべ  
きがわからず自分と同じレベルで判断することが  
多く核家族化などの影響がはつきり出てきている  
ことや、子育てから脱出したいという意識も強く  
なる傾向がみられるという感想が聞かれた。

説明、意見交換ののち園内(園地六、一二〇㎡、  
園舎一、〇九〇㎡)を視察したが、やはり恵まれ  
た教育環境と子ども達の伸び伸びとした姿が印象  
的であった。

○第百一回国会文教委員会會議録正誤

第十四号中正誤

ペシ 段行 誤  
二 二から ちよつと 正

第十五号中正誤

ペシ 段行 誤  
二 二から 格好 括弧 正